# はじめに

農水省は、国有林を利用した森林都市構想を数年前より打ち出してはいるが、未だその具体的な内容やプラン作成には至っていない。しかし林野庁が協力し、（社）森林都市づくり研究会が発行する会報「森林都市」では学界・政財界さらに地方自治体をも含めたメンバーが森林都市に関するイメージ作りやガイドライン作成を試みている。ところが、この会報をみる限り、森林都市に関する本格的な研究はわが国では未だ行われていないように思われる。

本研究は、森林都市構想というテーマの下に、現在のわが国の都市問題を解決するための有力な手段として、森林都市を考え、自然とりわけその代表ともいうべき森林を都市とどのようにかかわらせるか、についての客観的な分析と理論化とを試みるものである。

ここでは大きく２つに分けて、すでに大都市が存在していることを前提として、既存の都市と森林との理想的な共存関係を構築していく方法と、全く新たに森林都市を創設する場合のあるべき姿とについて論じた。

まず第１章では、わが国の都市と自然との関係を歴史的に分析し、都市民が自然と切断されていく過程を明らかにした。次に、近年、都市住民は異常とも思えるほどに森林や自然を希求している事実をとらえ、かの有名なハワードの田園都市論を考慮した上で、都市と森林との新しい共生のあり方として、日本型のツーリズムを提案した。

第２章では、森林都市を全く新たに創設する場合の理論的・実践的枠組みを経済学的に検討した。現在最も新しいとされる理論と各種のモデルを用いて、森林都市建設の望ましさを定式化した。

第３章では、森林都市を創設するに当たっての森林と宅地の最適配置について検討し、hedonic法を用いて最適配置をシミュレートした。

第４章では、わが国で森林都市をつくる場合に、法としての森林法や制度としての森林計画との間に存在する問題点や課題を提示し、ヨーロッパ諸国の森林計画も参考にしながらそのあるべき姿を示した。

以上のように、本研究は、森林都市に関しての本格的な研究であるといえる。

なお、本論の執筆者と担当部分は次のとおりである。

| | |
|---|---|
| 岩井吉彌（京都大学農学部） | はじめに、第１章 |
| 赤尾健一（早稲田大学社会科学部） | 第２章、第３章 |
| 松下幸司（京都大学農学部） | 第４章 |